

長く続く猛暑、いくらかでも涼を求めて

滋賀・高島トレイル・寒風(かんぷう 853m)に登る

猛暑、酷暑が続く日本列島。いくらかでも涼しい所へと、琵琶湖のほとりに聳える高島トレイル・寒風を目指した。

涼しげなメタセコイア並木道

8月15日、自宅を早く出たが、JR湖西線マキノ駅に着いたのは8時17分。すぐにタクシーでマキノ高原に向かう。途中、マキノ名所の「メタセコイア並木道」を抜けていく。運転手さんは「ここは黄葉の秋が人気です」と言うが、今日も別の意味で魅力的だ。濃緑の枝葉をまっすぐに高く豊かに茂らせ、幅広の道路に濃い影を落としている様は見からに涼しげ。

花が少ないキャンプ場とスキーゲレンデ

オメタセコイア並木→

8:40 同高原サラサ温泉前着。トイレを済ませ、身支度を整えてキャンプ場の中を上っていく。



キャンプ場の芝生は手入れが行き届いているが、花が少ない。わずかにオトギリソウが黄色の花を見せている。そして例にもれずここでも外来植物のブタナが咲いている。

登山口9:00着。スキーゲレンデの草地を、陽光に後ろ首を焼かれながら歩く。ここにも花がない。確かに今は花の端境期(はざかいき)だが、それなりの花があってもいい筈だ。草地を取り巻く林の縁にはリョウブ、クサギの白い塊が見える。

オオイワカガミの大群生地

9:20 登山道に入る。雑木林の中を進み、間もなく尾根道に出て、ジグザグを繰り返しながら、尾根をゆっくり登る。

沿道に多数のオオイワカガミの群落が続く。すでに花はないが、直径10cmほどもある大きな丸い葉が木漏れ日をはね返してテラテラと光っている。これを鏡に見立てて付けたのがこの植物名なのだ。花が咲くころに再訪したいものだが、果たしてそれは実現するだろうか。



連続する登り、滴り落ちる汗

オオイワカガミの葉→

汗が絶え間なく流れ、目に染みる。薄くなった眉毛が汗止めの役割を果たしていないのだ。自らの眉に毒つきながら、辛抱強く登っていく。首にかけたタオルもTシャツも汗でぐっしょり。

↓ブナ林のなかの登山路



涼風吹くブナ林

やがて道は見事なブナ林に入る。涼風が吹き抜け、気持ちよく登る。ここで今日二人目の登山者に出会う。「このブナ林が好きで、季節ごとに来ています」と言う男性は、風に身をさらしながら休憩していた。

ブナ林の林床にもオオイワカガミの群落が点在していたが、この花はもちろん他の花もなかった。

寒風山頂に吹く琵琶湖からの風

ブナ林をさらに登った所で、すれ違った二人の男性に「もう少しだから」と励まされて歩き、12:30 寒風山頂着。標高 853.8m。眼下に琵琶湖がひろがり、そこから吹き上げてくる風が汗にまみれた身体に涼しい。





↑ 疲れ切って帰着した登山口で

赤とんぼが飛び、ヒョウモンチョウが舞っている山頂で眺望を楽しんだ後。木陰で昼食を摂り、体を休めて13時丁度下山開始。

“足が残ってなかった” 状況に愕然

向かい風の中をゆっくりと下り、15:30 登山口着。

登山口に帰り着き、キャンプ場の舗装路を踏んだとたんに、脚がガクガクときた。

陸上長距離走やマラソンの最終盤で「足が残っていない」という言葉が使われるが、「ああ、こういう状態を言うのだろう」と思った。

2本のストックが無ければ、蛇行して歩いていたに違いない。

やっぱり下界は暑かった

湖国バスからJRへ、JRから近鉄へと乗り継ぎ、我が家最寄りの駅に降り立ったら、「熱風」が吹き付けてきた。やはり下界は暑かった。

改めて思った。「しんどいけど、山はいいなあ」。

続・続・二上山に咲く花々 54

クロバイ(黒灰) ハイノキ科ハイノキ属

樹下に散り敷く花もパッチリ

4月、雑木林の地面を真っ白に覆って、クロバイの花が散り敷かれます。(写真左)

見上げると梢にも花が満載。上か



ら見たら白一色の樹冠なのでしょう。

濃緑色の葉、そして真っ白な花

クロバイは主に西日本の山に自生する広葉小高木、高さ10mぐらいまで伸び、濃緑色の葉を密に茂らせ、前年枝の葉腋に花序を出し、真っ白の花を、これまた密集させて咲かせます。花の直径は約8ミリ、花びらは5弁ですが、写真でも分かるように、多くの雄しべを長く突き出します。

名前の由来は

クロバイの樹皮は灰黒色。その材を焼いて灰をつくるので黒灰＝クロバイと呼ばれてきました。また、葉の色がハイノキより濃く、密に茂るのが黒く見えるからとの説もあります。

クロバイの灰汁は染色の色落ち防止剤

クロバイの灰で作った灰汁(あく)は、染色の色落ち防止に使われ、珍重されたのです。人々はこの木に「灰の木」「黒灰」と名付けて活用してきたのでしょう。

くらしの中で、多岐・多様に活用されてきた灰

我が家では毎春採りに行くワラビのあく抜きに重曹を使いますが、重曹が日本に入ってきたのは明治期ですから、それ以前には灰または灰汁(あく)を使っていたのでしょう。

わらや木の灰は上記のほか、酒の醸造、畑地の土壌改良や肥料、石鹼替わりなどなど、人間によって、多岐多用に活用されてきました。

実は小鳥たちのごちそう

クロバイは秋には楕円形の黒い実をつけますが、これは小鳥たちのごちそうです。

